

第22回総合リハビリテーション賞贈呈式開催される

公益財団法人金原一郎記念医学医療振興財団主催、『総合リハビリテーション』編集室後援の「第22回総合リハビリテーション賞」授賞式が2014年9月24日、医学書院本社にて行われた。本賞は、『総合リハビリテーション』編集顧問の上田敏先生が、1993年に東京大学を退官される際に、金原一郎記念医学医療振興財団へ寄付していただいた基金を原資として発足した。授賞式では、上田先生より賞状・盾・賞金（10万円）が杉山先生に贈呈された。

受賞論文は、杉山統哉氏（中部労災病院リハビリテーション科）、他による「急性期脳卒中患者の歩行自立度と社会的サポートの関連—リハビリテーション患者データバンクの多施設登録データを用いた研究」（総合リハ：41巻2号，2013）である。2013年発行の『総合リハビリテーション』に掲載された40編の投稿論文のなかから、最も優れた論文として、編集同人の推薦を経て、編集委員会において選出された。

受賞論文は、リハビリテーション患者の多施設登録データを用いて、①社会的サポートの供給源である介護力と歩行自立度との関連を明らかにし、②介護力があると自主訓練をする者が増える可能性について検証したものである。

対象は、入院時歩行不能で選択基準を満たした9病棟の急性期脳卒中患者813名で、歩行自立・非自立を従属変数、介護力の有無を説明変数とし、性別、年齢、脳卒中のタイプ、在院日数、1日あたりのリハビリテーション単位数など17因子を調整変数として、ロジスティック回帰分析を行っている。

その結果、介護力「なし」（家族・友人などの介護者がいない状態）の者に比べると、介護力「あり」（介護に専念できる者がいる状態）の者が歩行自立する確率は2倍となり、社会的サポート源である介護力は、自宅退院のみならず、歩行自立にも影響している可能性があることが示唆された。また、介護力が歩行自立に影響した機序については、介護者に促されて行う自主訓練の増加によって自立度が向上したのではないかと推測できたが、自主訓練実施の有無は、介護力と歩行自立との関連にほとんど影響がないという結果となった。

本研究は、リハビリテーション患者の多施設登録データを用いて、その中から対象者を選定して統計的解析を行った机上の研究といえる。しかし、家庭の介護力という社会的サポートと身体機能である歩行自立度との関連を直接的に解析しようとした点は、臨床に根ざした素晴らしい着眼であると評価された。特に、介護力がどのような経路で歩行自立度向上に影響するかという点について、自主訓練の有無はほとんど影響がなく、それ以外の経路が機序と



して重要であるという可能性を示したことは、とても興味深いものがある。

編集委員を代表して伊藤利之氏（横浜市総合リハビリテーションセンター）は、講評のなかで、「本論文は汗をかいて行った研究とはいえないが、論文全体の構成、仮説、対象の選定と数量、解析手法結論の導き方、考察が丁寧かつわかりやすく記載されており、本研究で明らかになったこととその限界、今後の課題が読者に素直に伝わってくる論文に仕上がっている」と解説され、「論文作成の技術という点においても、高く評価できる」と強調された。

受賞の杉山氏は、本賞の受賞には多施設登録データを扱えるという場所に自分がいたこと、そのデータ分析を指導してくださる先生が近くにおられたこと、研究を後押ししてもらえ院内の環境があったことなど、「周囲の協力があってこそ」と謙虚に喜びの言葉を述べた。そして、「この賞に恥じないように、今後も努力を続けていきます」と締めくくった。若々しい笑顔がとても印象的であった。

「総合リハビリテーション」には昨年1年間で125本の投稿があり、採用は33本、採択率は26.4%という大変狭き門である。また、採用に至るまでに数度の修正を必要とする場合も多い。それだけに採用、掲載された論文は質の高いものとなっている。

本賞は職種を問わず、「総合リハビリテーション」誌に論文掲載時に45歳までのリハビリテーション領域の若い研究者が受賞対象となる。受賞を目指してぜひ、ふるってご投稿いただきたい。